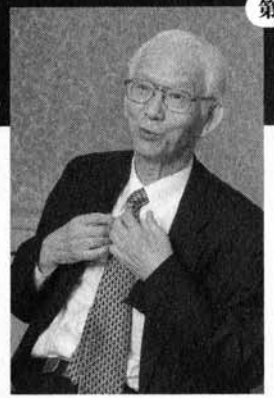
岩崎夏海×「旬」の人!!
ここでしか読めない談話満載!!

「もしドラ」SUPER INTERVIEW

第4回 上田惇生先生編——④



ドラッカー学会代表　上田惇生先生:1938年埼玉県生まれ。生前のドラッカーとも親交が厚く、『マネジメント』を始めとするドラッカー主要著作の全てを翻訳している。著書に『ドラッカー入門』『ドラッカー　時代を超える言葉』(ともにダイヤモンド社刊)がある。

社会の先頭に立つ人間には善悪の観念と教養が必要

翻訳こそ、相手を知る最良の方法

岩崎:先生が初めてドラッカーの本と出会ったのは、いつになりますか?

上田:27歳の時に経団連※に就職して、それからですね。経団連というのは経済団体だから、経済団体に就職した以上は経済がわからなきゃ、というわけで。そのためには、英語で書かれた経済の本を翻訳すると勉強になるよと、先輩に言われて。これは同じことをドラッカーも言っている。相手が何を考えているかを知るには、その人が書いたものを翻訳するのが一番の近道だよと。だからドラッカーは私のことをね、上田先生は自分よりも自分のことをわかってくれていると、年中書いたり言ったりしていて、こっちは単純に喜んだりしてたんだけど、特別ほめるようなことじゃないわけ。誰だって翻訳すれば書いた人間の頭の中は全部わかるんだから。ドラッカーの本はほとんどやってるわけだから、わかるのは当たり前の話で。私がえらいんじゃないわけよ(笑)

45年ほど前に、ドラッカーが危惧したこと

上田:それで、先輩が作った翻訳チームに参加していたら、ダイヤモンド社から今度は一人で翻訳してみないかと言われて。それが、日本語では『若き経営エリートたち』っていう本なんですが、これは成功している若手経営者についてアンケートとインタビューの大調査をして、一冊の本にまとめたものなんです。その推薦の言葉をドラッカーが書いてるんですが、そこで「今の若手の経営者たちは、めちゃくちゃ仕事ができる。でも、目的について何も考えない。この調子でいくとアメリカの会社、アメリカの社会がどうなるのか、それが心配だ」って書いてるの。

岩崎:それは、なかなかすごい推薦文ですね(笑)

上田:確かに、その当時のアメリカの若手経営者ってのは、いわゆる教養をバカにする世代なの。ヘルマン・ヘッセを読んで何の役に立つっていう。今の経営者の中には、当然読書家もいっぱいいらっしゃると思いますが。それで、本なんか全然読まないで、世の中に貢献とかじゃなくて金を増やすためには何してもいいっていう種類の頑張っている人たちばかりが経営者になっちゃったら、世の中は一体どうなるんだろう、ということを、1965年の推薦文で書いている。ドラッカーが相当心配したことだね。だけど、結局リーマンショックみたいなことが起こっちゃった。ああいう毒饅頭みたいな、世の中に出回ったら危険だという金融商品は、最初から開発しちゃいけないわけ。それを大学出たばっかりの、希望に燃える優秀な若者に販売させて、それが毒饅頭だったなんてね。本人たちも愕然とするけども、それを手にしたために地方の金融機関や大学のような教育機関がなけなしの金を投資してパーにしちゃった。

経営者にとっての教養の必要性とは

上田:作って良いものと悪いものがあるわけですよ。それを作ったってことは、教養がない、つまり善悪の観念がないからなんです。必ず、教養というのは善悪の観念がくっついていないといけない。教養そのものは変わっていきますよ。時代によって。でもそれにくっついている善悪の観念っていうのは常にあるわけですよ。教養ってのは、社会の先頭に立つ人間が、その能力と時間を使って身につけておくべきものなんです。かつてはお坊さんや、お医者さん、そういったえらい人たちがその役を担ってきたわけだけど、今は違う。会社で人を組織してものを作っている人たちが、世の中を動かしているわけだから。現代においては経営者が社会のリーダーの役をやらないといけないんだけど、それゆえにそういう人たちが教養なくなると、社会全体が困るわけですよ。

※社団法人日本経済団体連合会